

市長定例記者会見 ２０１０年１０月８日

- ・ 日 時 平成２２年１０月８日（金）午前１１時～
- ・ 場 所 本館３階第１会議室
- ・ 記者数 １５人

議題 「しまはくエンディングイベント」について

（市長）

今日は、「しまはく」のエンディングイベントについて説明させていただきます。

１日で２万４千人という大変大勢の皆さんに足を運んでいただいてにぎわった、４月２９日のアイテムえひめでのオープニングイベントを皮切りに、今月末まで開催されております松山島博覧会につきましては、これまで体験イベントをはじめ、約１００件にも及ぶ各種イベントを実施し、定員を超える申し込みをいただいた中で、多くの方々に参加をいただいて、大変好評を博しております。

これは、松山島博覧会の各種体験イベント等が、島の恵まれた自然や豊かな農水産物、歴史・文化などの地域資源を有効に活用し、島の方々自らが独自の発想と工夫で作り上げ、魅力あふれるものであったということ。また、多くの市民の方々に各種イベントを体感していただくことによって、背伸びをしない、あるがままの島の魅力というものを再確認していただけたこともその理由であると思っておりますが、それにもまして、島の方々が自分たちの住む島を元気にしたい、そして島のファンを増やしたいという強い思いを持って、「しまはく」成功に向けて、懸命に取り組んだからこそその成果ではなかろうかと思えます。

この松山島博覧会の最後を飾るエンディングイベントを、中島総合文化センターで、１０月３１日の日曜日に開催いたします。エンディングイベントは、単に松山島博覧会の開催期間の終わりを告げるだけのものではございません。これまでの実施状況を振り返り、さらに島の魅力を高めていくためには、どうすれば良いかということを考え、終了後も活性化に向けての取り組みを未来へつなげていくために実施するものでございます。

そのため、このエンディングイベントの主役は、あくまでも島の方々として、振り返りビデオの上映、および体験イベント主催者の実施報告や未来宣言、さらには今後の参考となり得る先進事例の講演などを予定しています。

大切なことは、この松山島博覧会を一過性のイベントとして終わらせないということでございます。松山島博覧会は、あくまでも多くの方々に島の魅力を知ってもらうためのきっか

けづくりとして位置づけており、この島博覧会の開催で生まれたさまざまな取り組みを継続していくことが重要ではないだろうかと思います。まちづくりの主役は、あくまでもそこに住む人々です。島に住んでいる人たちが結集して、自ら立ち上がり、新しいことにチャレンジしていくことが、島の活性化につながるものではないか、そんなふうに思います。

詳細については、担当から説明させていただきますので、よろしくお願いいたします。

（質問）

松山島博覧会は一過性のイベントではないということだが、来年以降も実施するイベントあるいは実施しないイベントがどの程度あるのか。また、松山島博覧会が終わった後、広報活動や船賃の支援など、市がどの程度、島でのイベントに関与するのか。

（市長）

まず、事業の精査というのは、まさに島の皆さんが主体となって考えていくことだと思います。その中で、エンディングイベントも含め、振り返りビデオや体験発表することによって、いろいろなメッセージが島民の皆さんに伝わっていくと思いますので、またそこから議論をされる中で、これはぜひ続けたい、これはやはりリニューアルしようか、あるいはこれはやめようか、そういうふうに集約されていく経過をたどっていくと思います。ですので、この時点でどれを続け、どれをやめるかというのを行政が上から目線で決めることはないということです。

それから、来年以降についてですが、現在のところ、私は11月10日が退任予定でございます。次の市長に誰になるか分かりませんが、私の足跡のまとめとしては、非常に有効ではないかということを申し添えさせていただきたいと思うのですけれども、それをどうされるかというのは正直申し上げて、新市長の下で決める話だと思っています。ただ、これだけ島の皆さんが一つになって実施していただき、立ち上がっていただいた事業ですから、きっとそれは引き継がれていくのではないかと考えています。バックアップの程度は私が決めることではありませんが、強弱はあるにせよ、何らかの形で続いていくのではないかなと予想しています。

（質問）

来場者数は当初の見込みどおりか。

（市長）

そうです。すべての事業の定員は全部オーバーしています。しまはくに行かれましたか。各島に行かれたことありますか。まだ行かれていないのですか。島は小さいんです。例えば何百人、何千人の島もありますが、安居島が一番小さく18世帯30人、そのぐらいの島でもイベントをするので、島はもうてんてこ舞いです。でも、そこでできるイベントの定員の限界は40人とかで、そもそも島民の皆さんが30人しかいないところで、みんなが総参加で受け入れられるのは40人とか、そういうイベントもあります。中島本島が一番大きくて

主ではありますけれども、そういう小さな島でのイベントなども含めての話になると、船の定員数や便数の限界もありますが、これは非常に大人数、たぶん通年だったら何人ぐらいになるのですか、人数的には島民の方から見ればかなり多くの方々が訪れているという実感だと思います。

こうした島々が、1万7000人を迎えたというのは驚異的なことだと思います。それともう一つ言えば、これはまた何の確証もありますが、愛媛県下にも島があります。例えば今治市にもありますし、宇和島市にもあります。これらの島々との連携も、これからひとつテーマに浮上してくるような気がします。「拡大しまはく」とか。

（質問）

県全体のレベルで「しまはく」を実施したいということか。

（市長）

そうになってきたらおもしろいかなと、より一層相乗効果というのが生まれるのではないかなと思います。

（質問）

市長選挙に関して、秋祭りで市長が、すでに立候補を表明している野志さんと一緒に活動しているところを見掛けたが、候補者の政治活動や選挙活動にどのようなスタンスで、どの程度関わるつもりなのか。

（市長）

自然体です。たぶん誤解があると思うのですが、それは和気地区のお祭りのことを言われているのですか。野志さんのおばあさんの出身地が和気一丁目です。私も里が和気です。だから、たまたま古里のお祭りに出ているということで一緒になって、お互いそれぞれ歩いてただけで、別に何にも一緒になってどうのこうのという意図的なことではありません。地元、自分にとってのルーツ、ゆかりの地のお祭りに当然のことながら行きます。そういう話です。確か野志さんは今、安城寺町に住んでいるのかな、ですから安城寺町のみこしも和気地区の祭りにも出ます。ですから、そういう話です。だから、あくまでも自然体です。

（質問）

今後は、積極的に共に活動するつもりはないのか。

（市長）

だから、すべて自然体です。自然体でこれからもやっていくつもりです。ただ当然のことながら野志さんは、私の12年間の市政の改革路線を継承そして発展させる唯一の候補者の方ですので、私の方からもエールは送り続けたいと思っています。

（質問）

唯一の方という根拠は何か。

（市長）

例えば、ある候補者の方の背景には、私の市政改革について野党の方々が中心となって推されているということがありますから、当然、改革を戻すというふうなところが色濃く出てこざるを得なくなると思います。もう一人の候補者の方も、市政については、野党という立場で反対の立場でやられていた方なので、当然のことながらこれまでと違った路線を歩むということになるのではないかと考えています。

（質問）

具体的な公約を見てどう思うのか。

（市長）

ある候補者の方の公約を見たら、今そのグループの方々が共産党さんと一緒にやられているので、共産党さんの政策をかなり取り込まれているという印象がありました。そんな理解での連携がその公約に反映されたのかなという気はします。

（質問）

市政の最重要課題の一つの水問題の公約を見てどう思うのか。

（市長）

今まで議員さんご自身がやってきたこと、発言してきたことを180度変える選択をされていますので、そのあたりの説明がまったくないことには矛盾を感じます。

（質問）

もう一人の公約はどう思うのか。

（市長）

現場の具体的なことをまだつまびらかに把握されていないので、よく分からないところがありました。

（質問）

野志さんの擁立に関して、市長はこれまでも繰り返し後継候補ではないと言っているが、野志さんは先日の出馬会見で後継と思ってもらって構わない、それは仕方がないことだろうと言って、お二人の発言が食い違っているが。

（市長）

全然、食い違っていません。それは。それは人によって、そういうふうに見られてしまうのは仕方がないのかもしれませんという前提で、人がどう思うかというのは、これは自由な

話です。ただ、ここの部分では思いの中に、自分の気持ち、私も改革継承・発展の選択肢ということと言い続けていますから、それに何ら変化もないし、それから野志さんもその気持ちで立っているところに何ら変化もない。ただ、それをもって、それは後継なんだというふうに見られてしまうかどうかというのは、人それぞれの見方ですから、そういうふうに見る方がいるのも、それもまた自由なことだと思います。

（質問）

市長の主観では後継候補ではないが、客観的には後継と見られても仕方がないということか。

（市長）

私の気持ちはそうではないですから、私は仕方がないというよりも、自由にされたいのではないかなと思います。もう一つ言えば、今回いろいろなきさつを見ていると、例えば候補者の中には後援会主導の方もいらっしゃる。そしたら、これは後援会のかいらいになってしまうわけです。ある意味、政党中心、そしたら政党のかいらいになります。国会議員の思惑があったら、国会議員のかいらいになります。私は逆にそういうふうに見ますから、そういう意味では自由だと思います。

だから繰り返し言い続けてきたのが、一番大事なことは首長経験からすると、まず一人立つという気概を持てるかどうか。それから、自分の手で書いた公約を作れるかどうか。これがあって初めてスタートではないかというのが、私の首長観、首長候補者観です。でも最初から候補者調整とかでスタートするというのは、私の選択肢、感覚からするとすごく違和感があります。

（質問）

野志さんが出した公約を見てどう評価したのか。

（市長）

改革継承ということを本人も言われていましたので、12年間やってきた私の本質というのをよく見極められて、それをベースにしながら自分の色を出されるというふうな工夫をされて自ら作り上げたという印象です。

（質問）

野志さんが公約の中で西条市からの分水について、4万8000立方メートルをお願いしたいと会見で言っていた。市長も、願う立場とこれまでも繰り返し言っていたが、4万8000立方メートルをお願いするというのは市長と同じ主張ということか。

（市長）

松山市議会の決議が変われば別ですが、それが松山市議会の決議です。9月議会の質問戦で、分水反対、4万8000立方メートルうんぬんと言われる議員さんも、自らの質問の中

で市議会の決議は重いと認められたのです。それを受け止めていただいて感謝しています。それを変えるとか、やめにするとかいう話ではないということを明言されているのです。行政の立場というのは、決議に基づいて対外的な交渉をしていますから、決議そのものが全員の議論の下に変わるものであるなら別です。でも、それは生きているということを、いろいろな意見を言われる方も認めているわけです。となれば、行政というのはその決議に基づいて一生懸命やるというのが筋です。

ですから、そこが何か非常にあやふやで、そもそも松山市が西条市と交渉を積み重ねている一番の元はどこにあるかというと、これまで時間をかけて4万8000立方メートルとはじき出し、19の方策を比較検討し、結論を出した市議会の決議がすべてです。市民の代表である市議会で決議されたことを受けて、行政は対外的な交渉に臨んでいるわけです。しかも、今のご質問のような意見を言われる方も、決議を尊重していただかねばならないと、それは生きていると、しかも変わるものでも、反対する、やめろというものでもないということをはっきり言われましたから、それに基づいて交渉するのが、我々行政の立場です。ですから、その矛盾をどう説明するのかというのが、全然見えないのです。

だからこそ、先ほど申し上げたように、ある方は自らが決議に参加しているわけですから、そこから180度変わる意見を言うときには、実はこのことについては私が決めました、そのときの1人で、その後はどうして変説してしまったのかというのを説明しないと、つじつまが合わないと思います。こういうふうな、つじつまの合わない公約をばらまかれてしまうと、また、つじつまが合わなくなり、どこかで暗礁に乗り上げると思います。それがまた違ったということになれば、私が出馬したときに申し上げたのは、そもそもこの国で政治不信が広がった一番のもとには、公約がないがしろにされるということが繰り返されたところにあるのではないかと。だからこそ、公約にこだわる市政を展開したいというのが、私の最初の選挙の主張でした。

こういうつじつまの合わない公約ということになると、また公約違うのかということで政治不信に拍車を掛けることにもなりかねないので、その点は候補者すべてが、やはりご自身のこれまでの過去のいきさつ、言動、行動、それと整合性のある公約をしっかりと出してもらわないと、またまた政治不信につながってしまうのではないかと、一政治家としてはすごく残念に思っています。

（質問）

野志さん以外の候補者2人の水問題に関する公約に、決議をどうすべきかという点が欠けているということか。

（市長）

そうです。そこがやはり一番大きな決定事項でしたので、そこをどうするのかと思います。議論するのは構わないのです。でも、決議が生きている以上は、我々行政というのは、

それに基づいてしっかり対外的な交渉を行っているわけですから、まさにそれに沿った、初めて話し合いの舞台がようやく整うわけです。これからどうなるのか分かりませんが、その決議に従った目標に向かって進んでいるという状況の中です。だから余計、何でそういうタイミングでこのような変説の説明もないままに、このような話が出てくるのか、私は政治家として理解できないです。

（質問）

2人とも、分水の4者協議の席には着きながら、別の可能性や4万8000立方メートルの再検証をすると言っているが。

（市長）

交渉は、そんなに甘いものではないと思っています。交渉というのは、誠心誠意というのがすべて最後の力になると思いますから、そのような交渉をダブル・スタンダードというと思いますけれども、そういう姿勢で相手に誠意が伝わるとは、私は過去の商社マン時代からの経験則からいっても、そんなに甘いものではないと思います。

それから、もう一つは地下水や面河ダムです。いともたやすく言葉に出てきますけれども、繰り返し申しますが、県内でも水利権はこれだけ交渉が難航するわけです。県境を越えたら、どれだけ交渉に時間がかかるか、そういうことの見通しはまったく示されてもいません。それから今年は何といっても、現在の面河ダムは15パーセント程度の貯水率で、いかに脆弱（ぜいじゃく）か露呈したわけです。かつ、面河ダムの場合、渇水時には水の90パーセントが使用されているという実態があります。しかも、面河ダムの農業用の水利権というのは6月から10月までの期間限定であるということ。こうしたことには何も触れずに、簡単に面河ダムと言うのはあまりにも無責任だと思っています。

それから、地下水についてですが、これは先般、水の勉強会の時に、後で報告を受けましたけれども、愛媛大学の地下水の専門家による指摘によって、この方は地下水の専門家ですが、松山市の石手川中流域の地下水には余剰がほとんど無いと明言されているわけです。何でそのことに触れないのか、触れた上であえて地下水を、それでも地下水なんだと、あるんだと、ではその根拠を言って初めて地下水に触れられると思うのですけれども、その専門家、愛媛大学の専門家の指摘を覆す根拠を持たずに地下水と言うのは、これまたあまりにも無責任なのではないのかと、そんなふうに思います。

（質問）

不足している水の量が1日4万8000立方メートルで、西条との話し合いでお願いするのも最初から4万8000立方メートルで交渉を始めるのか。

（市長）

そこは、今までの全部分析をしてほしいのですけれども、松山市長として言い続けたのは、一番に考えるのは西条の水を守るなんです。西条の水を守るためにはどうすればいいのか。

あるいはもっと言えば、生かすためにはどうすればいいのか。その上で分水していただける可能性、余力というのがあるのかないのかというふうな交渉をさせていただきたいということを、これまで言い続けてきたつもりです。議事録を調べていただいたら、それはお分かりいただけると思います。ぜひそこだけは正確に伝えていただきたいのです。そこを単に4万8000立方メートルと出されてしまうと、それは誤解につながります。だから本当、正確に、この水問題というのは同じ県民の話ですから、頼みますから正確にぜひお伝えいただきたい、本当にお願いします。

（質問）

野志さんが出馬会見で西条市に4万8000立方メートルをお願いに行きますと、市長より踏み込んでいるなと受け止めたが。

（市長）

いや同じです。私も4万8000立方メートルは西条市にお願いしています。でも、その前に水を守る。確か野志さんも、記者会見で西条の水を守るというのを第一に言っていたと思います。変わってないです。

（質問）

余力によっては4万8000立方メートルは満たされないが、ある程度の容量であれば水が出せるとなった場合、4万8000立方メートルが確保できなければだめなのか。

（市長）

それはやってみないと分かりません。まさに、先ほど申し上げた可能性のあるなしもあります。松山市の主張としてはそうなんですけれども、これから議論してみないと分かりませんから、まさに議論の中で答えがあるのかないのか、徐々に明らかになってくると思いますから、今の段階ではまだ答えが見えないわけです。

（質問）

仮定の話になるが、中村市長が知事になって、4者協議の場で松山市が分水だけではなく地下水とか他の方策も並行して検討しているという事態に仮になった場合、県あるいは知事の取り組みや考え方は影響を受けるのか。

（市長）

地下水は無いのです。だから、どうされるのかなと思っています。少なくとも私が今の市長である間には、やはり議会の決議に至るまでには、今申し上げたような議論も全部してきたわけです。ですから、地下水と言っていますが、地下水は無いというのは自分には分かっていますし、それから、面河ダムと言っていますが、簡単にできる話ではないというのは分かっていますから、その上で決議が変わるのであれば、これは仕方がないのです。その代わり、おそらく、このときに言えることは、松山の水問題の抜本的な解決はできませんということをはっきり言うべきだと思います。

それから、もし海水の淡水化に切り替える場合は、水道料金は１５パーセントではなく約４５パーセント上がるということをはっきり言わないと、それはあまりにも市民に申し訳ないと思います。その情報がないままに、こちらの方向、こちらの方向というのは本当に、私はあまりにも無責任なことではないかなというふうに個人的には思います。